

熊谷(以下・熊):画家の野見山暁治(のみやま・ぎょうじ)さんは1952年、31歳の時にパリに渡り、同じく1954年に渡仏した南桂子さんと親交を持たれています。パリ時代の南桂子さん、そして浜口陽三さんを知る数少ない中のおひとりです。今日は小説家で仏文学者の堀江敏幸(ほりえ・としゆき)さんをお招きし、お二人のお話を伺いたいと思います。

## 1950年代のパリ

堀江(以下・堀):野見山さんは1920年のお生まれですが、フランスに行かれた経緯は?

野見山(以下・野):私は、戦後何としてもフランスに行きたいと思った。美術学校の油絵科を出ているけど、戦前の日本に美術館というのは一軒もなかったし、当時の私達は油絵を教わりながら、西洋人が描いた本物は見た事が無いという非常におかしな科だったんです。そこで学んだ人は皆フランスに行くことを憧れていた。戦前からずっと鎖国状態で、現在のパリ画壇の情報が、一切入ってこなかつたんです。ある日新聞に私費フランス留学生募集というのが出てて、それを頼つて行った。

堀:1950年代に、本当に鎖国状態で、自ら解くようなかたちでフランスを中心としたヨーロッパに行きたいと。そういう時の気持つてやはり今と全然違つて、もっと濃くて、強くて、純真なものであったと思います。作品や言葉や絵やそういったものを通して想像でしか知ることがないんですけれども。その当時、他にどんな方がいらっしゃいましたか?

野:絵描きでは菅井汲(すがい・くみ)がいました。それからね、昨日も展覧会見に行ったんだけど田淵安一(たぶち・やすかず)。

菅井と田淵と僕とはひとつ違いくらいで、よく3人でつるん

であちこち行つたり、飲んだり喋つたりしました。金山康喜(かなやま・やすき)は富山の人(写真B)で、浜口さんの隣のアトリエに住んでいました。この人たちの住んでいるアパルトマンの最上階はアトリエになっている。フランスではそういうのがよくあるんです。

堀:この1950年代のアパートというのは、1930年代前後にできたものだと思います。これは屋上ですよね?(写真A、B)

野:そうです。浜口さんのアトリエの上の屋上はこうなっていました。アトリエの窓からグラシエールへ電車が出てつたり入つたりするのは丁度プラモデルかなんかみたいでね、面白くて見ていました。モンパルナスのひとつ隣の駅かな。

堀:野見山さんはその頃、いらっしゃったのは?

野:私はその頃メゾン・ド・ジャポンだから、ここから歩いて10分か15分くらいの所。近かったということもあってね。

堀:メゾン・ド・ジャポンというのは、パリの大学都市で、世界中の留学生が集まる町ですね。シテ・ユニベルシテといつて僕は入りにくかった町なんですけど、そこにメゾン・ド・ジャポンという、日本館とも言いますね。一階にフジタの壊れかけた大きな絵があって、僕が学生の頃には修復のための募金をしていたような記憶があります。でもその、フジタの絵をダメにした一因は少し、野見山さんがそこで卓球をしてボールを当てた、という噂が(会場笑)。本当なんですか、それは?

野:いやあ、あれはね、ひどいと思うんですけど。そう、横の壁がズラーっと全部フジタの絵なんです。そこにピンポン台があつてしまつちゅうやってたんですけど前から飛んできたのがそのまま絵に当たって、どんどんどんどん破けていく。やましいと思って、修理募金のお金はだいぶ出しました(会場笑)。



A: 左から浜口陽三、南桂子、堀内規次、野見山暁治 B: 南桂子、金山康喜

堀:52年に野見山さんがパリへ行かれて、南桂子さんがいらしたのが54年、2年後くらいですね。

熊:はい、先に浜口さんがパリへ行かれ、すぐ後に南さんが。

堀:その頃浜口さんとは自由美術で?

野:ええ。自由美術という絵の団体がありまして、色々な各会の不満分子がしゃくにさわって出てきては自由美術へ入つてくるから、吹き溜まりみたいな若者の小さい団体でしたけど、なかなかいい絵描きさんが多くて。

堀:当時の画家の交流や版画のことはよく分からぬですが、南さんはフリードランデルの工房(写真C)へ通っています。彼は1912年の生まれなので、50年代の時はまだ40代。僕は、文学のほうで言うと、アンドレ・ロートという画家が、わりと文学系の人と付き合いがあったようで、そこから結びついて名前だけは知っていました。

野:フリードランデルという人は事細かに技法を教えてくれる人だから、日本人にはよく彼を紹介した。僕も最初は浜口さんに連れていってもらったと思う。パリでは版画の工房で教えているところは2つくらいで、自分で作つたり刷つたりするところはいくつかあるんです。(下段左側につづく)



Musée  
Hamaguchi  
Yozo :  
Yamasaki  
Collection

## 美術館通信 No.15 2011.3.6

「南桂子生誕100年記念展 きのう小鳥にきいたこと

### 対談「南桂子とパリ」

司会:熊谷新子(リトルモア編集者)

## 野見山暁治(画家) × 堀江敏幸(作家、仏文学者、早稲田大学教授)



野:作品ですか?うん、とっても彼女らしい色を付けたなと思って。彼女は非常に控えめなところがあって、浜口さんはいつも仕事をやってたけど、僕はお桂ちゃんが版画の仕事をするところを見たことは無かったです。

### 南桂子、その眼差し

堀:この写真(E)は皆さんとても良い目をしていて、南さんの目もとても強いですね。年齢で言うと40代。ものすごく芯が強いというか、さっきのデュラスの小説にぴったりです。すごく空虚なにかを抱えていながら、しかも、その空虚を抱えたままでもやっていけるという強い意志がないと、こういう目は生まれないんじゃないかな。写真を見たときに僕はむしろ納得して、もしかしたらお描きになっている少女の目とある意味でそつくりなんじゃないかと感じました。

野:絵というのは描いてゆくうちに形がどんどん洗練されていくもんで、(南さんも)鳥や木の枝は洗練されたり違う形になつたりするんだけど、この女の子については全然形が変わらない。ひとりになつたりふたりになつたりするけど変わらない、彼女の体内に宿っている象徴的な子供なんだと私は思うんですけど。

堀:以前野見山さんは、「浜口さんが近くであれだけすごい創造をしているのに、南さんが作品の中にまったく影響を受けていないのがすごい」とおっしゃっていましたね。

野:僕らがやって来たときは版画には触れず、蔭で、こうゆう作品を作っていたというのはすごく芯の強い、これ大変だったろうという気がして。彼女の事を僕は優しい人だと書き、他の人もそう言ってるけど、優しいという以外の何か違うものがないと、浜口さんの横でこういう作品は作れないと。ただ、普段の

彼女はあどけない子供のようで面白かったです。ある日菅井汲と行きますと、家にお桂ちゃんだけがいて、ちょうど絵を描いていた。犬みたいなの横に、三角形が三つ並んでる。菅井が「これなんですねん」って聞いたらお桂ちゃんが「あのね、キツネがおむすびの番をしてるの」って。だから帰りに菅井と二人で「絵描きの女っていうのはやっぱり変わってるなあ。」つて言いあつた(会場笑)。昔は童話を書いてたっていうけど、お桂ちゃん自身が童話の中の人みたいでした。

堀:今の話をうかがつると、天真爛漫なところと鋭いキリのようなところが同居して感じる感じがしますね。そこが写真のような彼女のまなざしにつながる。作品を見ているとそういうところを全部感じとれるような気になります。

熊:最後に、堀江さん自身も80年代に留学され、パリ郊外が舞台の小説を書かれてますが、50年代のパリと、堀江さんが体験した80年代のパリの違いなど、どう感じていますか?

堀:全然違いますね。野見山さんや南さんたちの世代は、退路を断つてフランスに渡られた。下手をすれば、日本に帰つて来られない。そういう緊張があった。後の世代になるにつれて、それは薄れていきますし、決定的に失われていくものがあると思います。当時の様子は、作品を通じて想像するしかない。時々、タイムマシンでその時代に行って、一瞬でもおなじ空気を吸えたらと思うことがありますね。今日はこんなふうに野見山さんのお話をうかがうことができて、とても力になりました。

『堀江さんは、野見山さんの著書や南桂子に関する古書などを沢山ご持参ください、対談を盛り上げてくださいました。野見山さんのユーモアを交えたエピソードに何度も会場が沸きました。』